



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年11月29日 待降節第一主日B年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 63章 16b-17、19b節、64章 2b-7節

第二朗読：コリントの信徒への第一の手紙 1章 3-9節

福音朗読：マルコによる福音書 13章 33-37節

今日のテーマ：主を待ち望む

三つの朗読から

第一朗読での「立ち帰ってください」という願いのことばは、わたしたちのところに響きます。わたしたちは神に向かって、来てくださいと訴えるのです。なぜならわたしたちこそが「あなたを待つ者」だからです。神の他には待望できるものは何一つないと知っているのです。

第二朗読を読むと、恵みと平和は神さまからやって来ることに気付かされます(4節参照)。それは「キリストに結ばれて」(5節)、あるいは「キリストのお陰で」(同 フランシスコ会訳) 生じるものなのです。

福音朗読で繰り返される「目を覚ましていなさい」は、日常の生活のなかに来られるイエスさまを、油断せずに目を覚まして待ちわびていく、わたしたちの生きる基本姿勢を表しています。

説教

『イザヤ書』56章—66章は「第三イザヤ」と呼ばれています。時代は紀元前6世紀末から紀元前5世紀初頭。ちょうどバビロン捕囚の後の時代です。キュロス王の命令を受けて、捕囚の民は故国へ帰還できたのですが、彼らを待ち受けていたのはエルサレムの荒廃、周辺の民族からの迫害、日照りなどでした。約束された栄光が実現しそうにない現実で失望し、神への信頼を失い、勝手気ままな生活を始めるイスラエルの民に対して、預言者(第三イザヤ)は神への信頼の中で生きようと勧めます。

少し言葉の説明をしましょう。「立ち帰ってください」は、フランシスコ会訳では「帰ってきてください」。次の節の「天を裂いて降ってください」から、イスラエルの民が厳しい状況に置かれていることが伺い知れます。帰還してもペルシャ帝国による支配は止まず、食べ物に乏しく飢餓も生じていたからです。そんな中、人々は神への信頼を失っています。そのことは6節に「あなたの御名を呼ぶ者はなくなり 奮い立ってあなたにすがろうとする者もない」と記されているところから推察できます。

「心をかたくなにして」、神を「畏れない」ようになってしまったイスラエルの民は、神の怒りに触れ

で苦しんでいます。だからこそ、この民は、主にすがりより道がないことに気がつきます。それで、ためらいながらも神を待ち続けるのです。なぜなら、神は「陶工」のように人を形づくられる方だからです。

さて、『マルコによる福音書』13章は「小黙示録」と呼ばれています。終わりについての預言がイエスキリストの口から語られる箇所です。「人に惑わされないように気をつけなさい」(6節)と語り始められたイエスキリストは、本朗読箇所「目を覚ましていなさい」(33節)で話しを締めくくっています。

「目を覚ましていなさい」(33節)は、何に目を覚ますのかははっきりしていません。なぜ目を覚まさないといけないのか、その目的もはっきりしていません。ただ、ここでは「目を覚ましている」ことの重要さだけが強調されます。なぜなら「人の子が戸口に近づいている」(29節)からです。

「目を覚ます」の原語は「グレーゴレオ」です。これは「待つ」の同義語だそうです。「目を開けて、眠り込まずにいる」の意味が元々ですが、そこから発展して「待ち望んでいたことを取り逃すことのないように、油断せずに目覚めている」という心の状態、心構えの意味が生じます。

またここでは、小さなたとえが語られます。「旅に出る人」とは受難と死、復活の後に天に戻っていく(昇天する)イエスキリストを指すと理解してよいでしょう。「僕たち」、「門番」とは、残された弟子(使徒)たちと取ってよいでしょう。そして、弟子(使徒)たちによって教会が建てられたのですから、目を覚ましているのは教会です。「だから、目を覚ましていなさい」(35節)は33節に対応しています。二人称複数形で書かれていて、時を表す表現が続きます(「夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か」)。主人が帰ってくるのが「いつ」であるのか、人は知らないからです。その時を知ってるのは「父」だけです(32節:「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存知である」)。

目を覚まして待つのは、世の終わりや裁きではなく、キリストが再び来られることです。その時、人は神の慈しみに触れるのでしょうか。

ひとこと

待つという行為は二つの事柄、あるいは二人の人がいなければ存在しません。つまり、「待たせる人」と「待つ人」の関係です。「待つ人」の気持ちに対しては、わたしたちは比較的寄り添いやすいです。時には「何時間でも待てるわ」と言ってみたりもします。しかし、待つ時間の大切さに、本当に気がついていいるのでしょうか？ また、もっと重要なのは「待たせる人」の気持ちかも知れません。どんな思いで相手を待たせているのでしょうか？ 太宰治の短編『走れメロス』は皆さんもご存知でしょう。メロスは、まさに「待たせる人」です。「待たせる人」のこころの変化が描かれた物語として読んでみてもおもしろいかもしれません。

「待つ人」は自分こそが相手の気持ちをよく知っていると思っています。しかし、実は「待たせる人」の方が相手の気持ちをよく理解しようと努めるのではないのでしょうか。お互いに相手のことを思いつつ、「待つ人」と「待たせる人」の間柄はさらに深いものとなっていきます。

「待つ人」とはわたしたち人類、「待たせる人」とは父である神です。